

トロミ水を用いた嚥下障害スクリーニングの有用性

ペースト食に特化した新たなアセスメントツール

百崎良 安保雅博 小林一成 角田亘 東京慈恵会医科大学リハビリテーション医学講座

【背景・目的】嚥下障害者には適切な栄養状態・健康状態を保つためにも誤嚥をおこさない食品の選択が不可欠である。今回我々はペースト食が安全に経口摂取可能かどうかを判定するためのアセスメントツールとして考案したトロミ水を用いたスクリーニング検査の安全性、妥当性を検証した。

【対象】対象は咽頭期嚥下障害が疑われ、リハビリテーション科が介入を要した嚥下障害患者のうち嚥下内視鏡の実施が必要と判断された症例 80 人(年齢：79 ± 8 歳、男性 47 名、女性 33 名、Functional Oral Intake Scale：2.4 ± 1.4)である。なお、意識レベルが JCS2,3 桁、38 以上の発熱、Sat93 以下、気管切開、口腔汚染著明、従命不能例は除外した。

【方法】我々が考案したテストは pre-examination と swallowing test の 2 パートから構成されている。pretest として提舌、空嚥下が可能かどうか、湿性嚙声を伴わない随意発声、随意咳嗽が可能かどうかをみた。pre-examination が可能であれば 3000cp のトロミ水 4cc を咳嗽なく、声音変化なく、呼吸変化なく、2 回連続して飲むことが可能かどうかを確認した。pre-examination と swallowing test の全てが可能であればトロミ水テストは陰性、一つでも不可能であれば陽性とした。その後 16,000cp のペースト食を用い嚥下内視鏡検査を行い、誤嚥の有無を確認した。ペースト食誤嚥に対するテストの感度、特異度を求めた。

【結果】テストは 10 分以内に施行可能であった。テストによる呼吸状態の悪化や肺炎などの有害事象は認めなかった。全患者の 45% にペースト食誤嚥がみられた。ペースト食誤嚥に対するテストの感度 94.4%、特異度 88.6%、陽性的中率 87.2%、陰性的中率 95.1% であった。テストのプロトコールを水で実施した結果、感度は 94.4% と変わらなかったが特異度が 75% と低下した。

【考察】テストの安全性と妥当性が確認された。安全性に関しては pre-examination を行うことで安全に swallowing test ができない症例を事前に除外できている可能性が考えられた。ペースト食が十分量経口摂取できれば栄養学的には補助栄養が不要であることが多いため、本テストは経口摂取への早期移行、経管栄養や点滴からの早期離脱、補助栄養による有害事象の軽減、ひいては栄養状態の改善、全身状態の改善などに寄与しうると考えられ、NST 活動や嚥下障害診療に貢献できると考えられた。